

### 「空気」に関する論考(1)日本人の人間関係 と行動を規定するモノ

江村, 裕文 / EMURA, Hirofumi

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Intercultural Communication, Hosei University  
Ibunka / 異文化. 論文編

(巻 / Volume)

17

(開始ページ / Start Page)

5

(終了ページ / End Page)

23

(発行年 / Year)

2016-04-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013316>

〔論文〕

# 「空気」に関する論考 I

—日本人の人間関係と行動を規定するモノ—

## On Japanese “Mood” I

—What makes Japanese to be Japanese—

江村裕文  
EMURA Hirofumi

【キーワード】

KY 山本七平 森有正 二項関係 一人称 二人称 場面  
場面依存

### 0 はじめに

本稿で「空気」というのは、窒素や酸素の混合した地上の気体のことではない。

「KY」つまり「空気が読めない」という表現で人口に膾炙しているあの「空気」である。本稿は、「空気に関する論考 I」として、「1」で「KY」をめぐるマスメディアに取り上げられた「空気」の実例について論じることで「空気」論に対するイントロダクションとし、「2」では「空気」という単語の辞書類における記述を確認する。次いで「3」では「空気」論の嚆矢というべき山本七平の「空気論」を、その関連で「4」で森有正の「二項関係」論を紹介し、「5」で「空気に関する論考 I」のまとめと「空気に関する論考 II」への課題を述べる。

### 1 「KY」という表現について

「KY」という表現が人口に膾炙するようになったのは、2005年から

2006年前後のことだと思われる。この「KY」という表現がマスコミに初出したのは、『週刊朝日』2007年7月20日号の誌上でのことである。

それは、自民党の安倍政権（2006年9月26日－2007年9月26日在任）当時のことであった。

〔明治学院大の〕川上〔和久〕教授〔政治心理学〕は最近、電車の中で、女子高生のやりとりを耳にした。原爆投下「しょうがない」発言で、久間〔章生〕防衛相が辞任した直後のこと。

「あれってヤバくなーい」

「やっぱ、安倍ってKYなんだよー」

川上教授は帰宅後、KYとは何かと娘にたずねた。

「ああ、『空気、読めない』の頭文字だよ」①

これを受けて（であろうか）、2007年8月10日付けの朝日新聞紙上の「窓」欄に「安倍首相は「KY」？」という記事が載った。

最近、中高校生の間では「KY」という言葉がはやっているらしい。

「K」とは「空気」、「Y」は「読めない」。仲のいい友人同士の間で、周囲の雰囲気気づかず勝手に行動する級友がいたら、「あの子はKY（空気が読めない）だ」という使い方をする。

この若者言葉が安倍首相を評する時にも使われている。

参院選での自民党の惨敗を話題に、友人の大学教授と雑談していた時だ。

「安倍さんは、世間の空気が読めてないのかなあ」と言う私に、教授は「彼は『KY』なんですよ」と笑った。中学生の娘さんから教わったのだという。（後略）②

また、2007年8月16日付けの朝日新聞紙上の「消えた「男の子」－メディア社会の中で」というコラムにも、「KY」ではないが「空気」に関する記述がある。

（前略）「好感がもてる男の子のタイプ」を男子に聞くと1位が「人

に配慮ができる人」で、「嫌い」の1位は「場の空気が読めない人」だ。

「大人並みの対人関係を求められる時代になり、うまく人と合わせる技術を学ぶ必要が出てきた」と原田さん（報告者：筆者注）は分析する。（後略）③

2007年11月2日付けの読売新聞でも、「人づき合い「苦手」61%「煩わしく感じる」83%」という記事に、以下のような記述が見られる。若者を中心に、周囲の状況や雰囲気合った言動を取らない人を「KY（空気読めない）」と呼ぶことが流行しています。④

ここでははっきりと「流行している」との指摘がある。

2008年2月5日付けの読売新聞の「ローマ字略語辞典を出版 KY「空気読めない」、JK「女子高生」…」という記事には、

若者中心に流行している「KY（空気読めない）」などローマ字式略語約400語を収集したミニ辞典「KY式日本語」（大修館書店）が7日、出版される。ネット社会を背景に急増するKY語の問題も指摘した。

同社では、3年前から中高生などから辞書に載せたい新語を募集。当初はこうした略語は目立たなかったが、昨年秋締め切った第2回（応募約4万4000件）では、「KY」が1位となったほか、「JK（女子高生）」「HK（話変わるけど）」などベスト100中五つを占めた。（中略）

編著にあたった北原保雄・筑波大前学長（国語学）は、「言いにくいことを遠回しに表現したり仲間意識を高めたりするKY語は、言葉遊びとしては面白いが、氾濫（はんらん）しすぎると、日本語の文末をあいまいにってしまう問題点もある」と指摘している。⑤

と、「流行している」だけではなく、ミニ辞典に採録されたとの報告までである。⑥

同じく、2008年4月11日付けの読売新聞の「KY、MK5…略語「使う」32%」という記事には、

「KY（空気読めない）」といったローマ字式の略語が流行しています。こうした略語に対する10～30歳代の意識を探ると――。（中略）

若い世代には“空気を読む”ことを重視し、その場の雰囲気に合わせてするために略語を活用している一面もあるのかもしれませんが。

会話で使ったことがある言葉（複数回答）の一位は「KY」の59%で、「MK5」（マジキレる5秒前）11%、「MM」（マジムかつく）8%など他を大きく引き離しました。広く使われている略語は意外と少ないようです。⑦

と、「KY」がかなり市民権を得ているというか、一般的に使われていることがわかる。

2012年5月11日付けの朝日新聞の「人口知能の挑戦」という題の「耕論」というコラムには、「21年までに東大突破する」という新井紀子さんの文として、

（前略）コンピューターはいわば頭が固く、状況判断が苦手なKY（空気が読めない）なんです。（後略）⑧

という具合に、使われるようになっている。

ただし、2007年12月26日付けの毎日新聞、東京夕刊には、「空気読んだ？ 女性から人気の本格派俳優・小栗旬さん（25）」という記事があり、

「KY（空気読め）って言葉、オレは許せない。どこまで知的レベルを落とせばいいんだ、この国は、って思います。オレだって勉強ダメですけど、でも自分の中に良い悪いの基準はちゃんとつくっているつもりだから」

という小栗旬のことばを引用しているが、ここではKYは「空気が読めない」ではなく、「空気読め」という意味で使われている。⑨

## 2 辞書に見る「空気」の記述

では、この「KY」で使われている「空気」とはいったい何なのか。また「空気を読む」とはどういうことで、「空気が読めない」とはどういうことなのか。

ここでは、「空気」およびその類語について、代表的な辞書の記述を紹介したい。

『広辞苑』第六版には、「空気」という項目があり、「⊖地球を包んでいる無色透明の気体。(以下略) ⊖その場の気分。雰囲気。「陰悪な—」⑩とある。

『大辞泉』には、「⊖地球を包む大気圏の下層部分を構成する無色透明な混合気体。(以下略) ⊖その場の雰囲気。「職場の—になじむ」「陰悪な—が流れる」「自由な—を吸う」⑪とある。『大辞泉』にはさらに「空気」の項目に「空気を読む」があげられており、「その場の雰囲気から状況を推察する。特に、その場で自分が何をすべきか、すべきでないかや、相手のして欲しいこと、して欲しくないことを憶測して判断する。」⑫と解説されている。

『明鏡国語辞典』にも『大辞泉』と同様の記述が見られる。「空気を読む」では「その場の雰囲気をくみ取る。「—んだ発言」⑬との説明があり、さらに「その場の雰囲気がくみ取れないことは「空気が読めない」という。「空気が読めない人」⑭との記述がある。

「雰囲気」については、『広辞苑』第六版では、「⊖地球をとりまく気体。大気。空気。⊖その場面またはそこにいる人たちの間にある一般的な気分・空気。周囲にある、或る感じ。ムード。アトモスフェア。「家庭的な—」「—を乱す」⑮と解説している。

『大辞泉』では、「⊖天体、特に地球をとりまく空気。大気。⊖その場やそこにいる人たちが自然に作り出している気分。また、ある人が周囲に感じさせる特別な気分。ムード。「家庭的な—の店」「職場の—を壊す」「—のある俳優」⑯と説明している。

『明鏡国語辞典』では、「その場やその場の人々がかもし出している気分。また、ある人が周囲の人々に感じさせる独特の気分。ムード。「なごやかな—」「陰悪な—が漂う」「明るい—の人」⑰と説明している。

また、『使い方の分かる類語例解辞典』は、「雰囲気・ムード・空気」

に共通する意味として「その場所や、そこにいる人たちが自然に作り出している、ある感じ」と記述している。「雰囲気」の使い方として「家庭的な——」「なごやかな——」が「かもし出される」「大人の——のある人」「——のある店」、「ムード」の使い方として「ロマンチックな——に酔う」「——のない人」「——音楽」、「空気」の使い方として「事故現場の緊迫した——が伝わってくる」「気まずい——がその場をつつむ」がそれぞれあげられている。さらに「使い分け」として①「雰囲気」は、人や場所などが発散する独特の、ある感じについてもいう。好ましいものであることが多い。②「ムード」は、かなり情緒的なものをいうことが多い。③「空気」は、その場にいる人々を支配している気分をいうことがおおい。「…がある（ない）」の形では使えない。

## ⑱

との説明がある。

これらをまとめると、「空気」とは「その場、つまりその場所にいる人々のかもし出す気分・雰囲気」で、「空気を読む」とは「その場の雰囲気から状況を推察する。特に、その場で自分が何をすべきか、すべきでないかや、相手のして欲しいこと、して欲しくないことを憶測して判断すること」であり、「KY（空気が読めない）」は「その場の雰囲気から状況を推察できない。つまり、その場で自分が何をすべきか、すべきでないかや、相手のして欲しいこと、して欲しくないことを推測できない、判断できないこと」ということができるだろう。

### 3 山本七平氏の「空気」論

山本氏は、イザヤ＝ベンダサンというユダヤ人を装ったペンネームで1970年に『日本人とユダヤ人』を著わした。この著作がその後のいわゆる「日本人論ブーム」の火付け役となったのは周知の事実であろう。筆者はこのときから山本氏には注目し、その後の「日本教」論などを興味深く追いかけていた。1977年に『「空気」の研究』が出版

されたときもすぐに手に入れた（筆者は26歳）。またこの書が文庫化したときにも手に入れている（1983年）。

今現在目の前にあって参照しているのは、文藝春秋社の山本七平ライブラリーの第一巻として『「空気」の研究』という表題で、「「空気」の研究」「あたりまえ」の研究」が合本されて1997年に出版された一冊である。この『「空気」の研究』は、「「空気」の研究」「水＝通常性」の研究」「日本的根本主義（ファンダメンタリズム）について」の三部から成っている。空気論にしる水論にしる、日本人論であるとすれば「日本人とは」という根本的な問題を提起しており、その流れに乗れば最終章が「日本的根本主義（ファンダメンタリズム）について」になっているのは当然の結果であろう。

本稿のテーマである「空気」に関する山本(1997)の最初のエピソードは、山本氏のもとにある教育雑誌の編集員が訪れ、「道德教育」について意見を求めたという話である。

編集員は山本氏の意見に、  
「はあ、では道德教育にご賛成ですな。いまはそういった空気ですな」という、まことに奇妙で意味不明の返事をしてから、相手は「では、どのような点からはじめたらよいのでしょうか」と言った。「それは簡単なことでしょう。まず、日本の道德は差別の道德である、という現実の説明からはじめればよいと思います」<sup>⑱</sup>（中略）

「そうはおっしゃっても、それはまあ理屈で、現場の空気としましては、でも・・・で、どんな事実がありますか」<sup>⑲</sup>

ここで山本氏は実例をあげた。しかし編集員の答えは、  
「いや、そう言われても、第一うちの編集部は、そんな話を持ち出せる空気じゃありません」<sup>⑳</sup>と言ったという。

ここから山本氏の「空気論」がはじまる。

大変に面白いと思ったのは、そのときその編集員が再三口にした「空気」という言葉であった。彼は、何やらわからぬ「空気」に、自らの



意思決定を拘束されている。いわば彼を支配しているのは、今までの議論の結果出てきた結論ではなく、その「空気」なるものであって、人が空気から逃れられない如く、彼はそれから自由になれない。従って、彼が結論を採用する場合も、それは論理的結果としてではなく、「空気」に適合しているからである。採否は「空気」がきめる。(中略)従って、何かわけのわからぬ絶対的拘束は「精神的な空気」であろう。②

二番目のエピソードは、戦艦大和出撃についてである。

驚いたことに、「文藝春秋」昭和50年8月号の「戦艦大和」でも、「全般の空気よりして、当時も今日も（大和の）特攻出撃は当然と思う」という発言が出てくる。(中略)大和の出撃を無謀とする人びとにはすべて、それを無謀と断ずるに至る細かいデータ、すなわち明確な根拠がある。だが一方、当然とする方の主張はそういったデータ乃至根拠は全くなく、その正当性の根拠は専ら「空気」なのである。従ってここでも、あらゆる議論は最後には「空気」できめられる。③

そこで山本氏は、「では、この「空気」とは一体何なのであろう。」④と、「空気」そのものについて言及する。

それは教育も議論もデータも、そしておそらく科学的解明も歯がたたない“何か”である。⑤

先生が、その実例をくわしく生徒に話し、こういうことは絶対にいけませんと教えても、その生徒はもちろん教師も、いざというときには「その場の空気」に支配されて、自らが否定したその通りの行動をするであろう。(中略)そしてその理由を問えば、その返事は必ず「あのときの空気では、ああせざるを得なかった」である。⑥

さらに、

それは非常に強固で絶対的な支配力をもつ「判断の基準」であり、それに抵抗する者を異端として、「抗空気罪」で社会的に葬るほどの力をもつ超能力であることは明らかである。⑦

とし、

「あのブーム時の空気では、ああするよりほかはなかった」「あの当時の空気を思い起こすと、あれでよかったのだと当時も今もそう思っている」「当時の空気を知らない史家や外交評論家の意見には、一切答えないことにしている」⑳

が、言い訳のことばであると喝破している。

山本氏のいう「空気」が、その「場」の人々を拘束する原理としてはたらし、その「場」では、何ら論理的・科学的な議論は力を持たないにもかかわらず、「その場の空気」ですべてが決定してしまう。そういう「モノ」として、山本氏は「空気」をとらえている。

この「空気」論に対して、谷沢氏は『山本七平の智恵』の中で、

この「空気」というのはちょっとコメントをつけにくい、言われたらいちどにわかることである。これを最初に持ち出した着眼はすごいと思う。日本人のものの考え方、意志決定の仕方に、もしエポックを見つけるとするなら、この『「空気」の研究』が書かれたときではないか。㉑

と、評価し、さらに山本氏の議論への補足として、

その「空気」がみんなに滲透するのに、ある一定の時間が要る。日本の会議が長引くというのは、みんなが侃侃諤諤議論を戦わすからではなくて、「空気」が立ち込めるのに時間がかかるからである。㉒

という例をあげている。この例は、我々は実感が伴っていて共感を覚える例であろう。大学でも教授会をはじめ様々な会議があるが、言われてみると、たしかにそうだと膝を打つご同輩も多いのではないかと思われる。

このような「空気」については、「大東亜戦争」（アメリカの呼び方は「太平洋戦争」）の開戦の際に、日本やアメリカでどういう「空気」だったのかを描写した最近の著作にもみられる。『アメリカはいかにして日本を追い詰めたか：「米国陸軍戦略研究所レポート」から読み解く日米開戦』の中でレコード氏は、

連絡会議では敗北の可能性とその結果もたらされる事態は議論されていない。むしろアメリカと戦うことが日本の宿命であるかのような空気に覆われていた。意思決定者でさえ制御できない運命が支配しているかのような感覚である。③①

と記載しており、訳者の渡辺氏は、

アメリカ国民の厭戦の空気の核心部分には「ベルサイユ体制で作りに上げられた異形のヨーロッパの姿を温存するために」あるいは「大英帝国の既得権益を保持するために」アメリカの若者が血を流すことになっては、たまらないという信念にも近い思いが凝縮していたのである。③②

と解説に書いている。いずれも山本氏が指摘した「空気」の支配に関わる内容の叙述である。ただし、これではアメリカにも「空気」が存在するということになりそうだが、ここでは深入りしないでおく。

#### 4 森有正氏の「二項関係」論

さて、『イスラムの読み方：なぜ、欧米・日本と折りあえないのか』でも、加瀬氏と山本氏は、山本氏の「空気」論を発展させて議論している。

加瀬「たとえばあるときは「私」といったり「小生」といったり、相手によって自分の価値が極端に左右される。(中略)自由自在に自分を変えるから、しっかりとした自分というものがない。」

山本「その集団における自分の地位がわからないあいだは、口がきけないのです。(中略)だから日本語に「I」はないんです。普通に話している場合も、二人称しかない国ということになる。」③③

山本「ですからお互いに二人称でしかないんです。一人称でものを言っちゃいけない。」③④

山本「あいつは我が強いなんて言われますと、社会全体から無視されますから、無視されないように無私になるんでしょう。」③⑤

ここでは「空気」という表現自体は出てこないが、その場を構成する人間関係のほうが、自分が自分であることよりも優先されるという例について議論されている。

これは森有正氏の「二項関係」の議論につながる。森氏は自らの思想の集大成として『経験と思想』をまとめている途中で死によってその作業を中断された。<sup>③⑥</sup>

この著の第二章あたる「出発点 日本人とその経験 (b)」をここで手短かに紹介する。

森氏は、まず、

この稿の目的は、一箇の人間が「経験」から出発して自己の「思想」に到る過程を、すなわち自分の存在を自ら知り、それを組織し支配するに到る過程を、私一箇の探り求める道筋に即して明らかにすることであった。<sup>③⑦</sup>

とし、まず「経験」について、次いで自らが小学生の時から音楽をやっていたことを踏まえて、

そこで私が身に沁みて経験したことは、客観に徹すれば徹するほど主観性が確実になって来るということであった。さらに言い換えると、主観が深められ、自由になって来る、すなわち新しい発見が起こって来る、ということである。<sup>③⑧</sup>

と、「主観」と「人間的客観」「三人称的客観」の関係を述べている。

ここで議論の中身が本稿の当面の主題と直接結びつくことになる。

前に私（森氏：筆者注）は、日本人においては、「経験」は一箇の個人をではなく、複数を、具体的には二人の人間の構成する関係を定義すると言った。<sup>③⑨</sup>

二人の人の間の関係ということをやったが、それを便宜上「二項結合方式」(COMBINATION BINAIRE または RAPPORT BINALE)あるいは略して「二項関係」あるいは「二項方式」と呼ぶことにする。これは固有の意味においては、二人の人間が内密な関係を経験におい

て構成し、その関係そのものが二人の人間の一人一人を基礎づけると  
いう結合の仕方である。④①

と、「経験」を語る際には、客観的、三人称的な関係ではなく、「二  
項関係」的な二人称的な関係が重要で、日本社会はこの「二項関係」に  
よって成り立っているのだ、と主張し、

日本で昔から言われている義理人情、あるいは恩と報恩という考え  
方、あるいは在り方は、こういう事態の上に成立しているのである④②

と説く。さらに日本語の「人称」を取り上げ、

例えば「これは本です」と言えば、意味から言えば、「これは本で  
ある」、「これは本だ」と全然同じであるが、この両者に比較してより  
丁寧に言うという態度を示している。もっと丁寧になると「これは本  
でございます」という風になる。(中略) 私は、これも亦日本語にお  
ける「現実嵌入」の顕著な例であって、話し手と聞き手との、その場  
の「二項関係」の中に社会的階層が表れているものであると考える。(中  
略) この場合、この助動詞は両者(話し手と聞き手：筆者注)の関係を  
示すと共に、話の内容を肯定し、断定し、確信するという意味合い  
を含んでいる。(中略)であるから、「AはBだ」ということが、「A  
はBである」、「AはBです」、「AはBでございます」、「AはBでござ  
いましょう」、「AはBでございましょうか」、などという色々な形を  
とることになる。(中略) こういう風に助動詞は、単独で、あるいは  
複合して、話し手の陳述の内容に対する主観の関係を述べるのである  
が、それは同時に自分が相手にとっての相手であること、つまり二人  
称にとっての二人称であるという建て前から使用されるのである。④③

「私」が発言する時、その「私」は「汝」にとっての「汝」である  
という建て前から発言しているのである。日本人は相手のことを気に  
しながら発言するという時、それは単に心理的なものである以上、人  
間関係そのもの、言語構成そのものがそういう構造をもっているのだ  
ある。④④

要は、二項関係という稍、単純すぎる形で日本人の人間関係を要約したことが、単に主観的、直感的、恣意的なものではなく、「日本語」という実在する言語の中に《客観的》に析出出来ることを指摘したかったのである。④

森氏の議論の途中に「前に」という表現があり、ここで論じている内容のきっかけのようなものは、すでに論じたということになっている。筆者はそれ以前に著わされた森氏の著作を順に確認していった結果、その個所を発見した。それはノートルダムに関する森氏の最後の作品集、1976年に出版された『遠ざかるノートルダム』に収められている「「ことば」について」というエッセイである。

森氏は、日本語の教師を経験することで、

日本語というものについて色々と反省する機会をもつことになった。⑤

しかし両者（日本語とフランス語：筆者注）の間には、根本的な性格の相違があることが判って来た。それは日本語に著しい或る一つの特徴、現実が言語の中に「嵌入」している度合が極めて強いということである。たとえば、「これは本です」という場合、「これ」というのはもちろん「ことば」であるが、どうも純粹の「ことば」ではなく、話者の近くにあるものを指す作用をもっており、「これ」という符号（それは外に何と言ってよいか判らない）によって支持されているものそのものがこの文章の主格に当たるものと考えざるをえない。⑥

と、「現実嵌入」というアイデアを示している。ここでの問題は、日本語の代名詞の「文脈指示」と「場面指示」と呼ばれる現象に関係してくる。ここで森氏が「現実嵌入」と呼んでいるのが「場面指示」であるが、この「場面指示」というのは、そこに出現した代名詞が、テキスト内の文脈に現れた先行詞としての名詞を、ではなく、その「場(状況)」のコンテクストにある「もの」を指示するという機能を持っているとされる場合の使い方のことである。よく日本語はコンテクス

ト依存性の高い言語であると言われることがあるが<sup>47</sup>、森氏は、この話題について別の表現で指摘したまでである。森氏はさらに、

ところが面白いのは文章の最後に来る「です」という助動詞である。これはフランス語の *c'est* などとは根本的に違う性質をもっている。というのは、「これ」は決して「です」の主格ではないからである。元来「です」には主格はないとみるべきだと思うが、強いて潜在主格とでも言うべきものをさがすと、それは話者自身、つまり一人称であり、しかもその一人称は、対話者、つまり二人称と一つの情況に置かれている一人称なのである。だから、「です」という敬体の助動詞においては、一人称と二人称とが融合した形で、それを支え、上の文章全体はこの情況の機能になっているのである。だから相手が変われば「です」は「である」、「であります」、「でございます」などと変わってくる。(中略)

ところで、私は、この助動詞、あるいは機能的後置詞は、これまた日本語における現実嵌入の顕著な場合であると思う。というのは、その様々な変化は、正に日本の現実社会における階層関係がそこに「嵌入」して来ているからであり、それは動詞のアスペクトという本来の形態的变化によって敬体を表す側とは本質的に異なるからである（見る→見られる）。そしてこの機能詞において重要なことは、それが一人称（的）であるのみでなく、対者、すなわち二人称によって決定的に情況化されているということである。<sup>48</sup>

ここでの森氏の議論の前半、「です」の主格は何かという議論については当然異論があるであろう。森氏の議論のポイントはそこではない。森氏は、英語の《*is*》に当たる《*です*》が具体的には「だ」「である」「です」「でございます」という様々な語形で実現化するメカニズムについて語っているのである。それはまさしく「あなた」にとっての「私」がだれかという人間関係の異なりという、その場その場の具体的な「場面（状況）」に依存しているのであり、それを森氏は「わ



たし」が「対者、すなわち二人称によって決定的に情況化されている」と説明しているのである。このことを、森氏は、

二項方式的関係においては、第一人称と第二人称とが、いわば融合し、第二人称であることがたえず第一人称であることの内容になっている、ということである。<sup>④⑨</sup>

とし、

もう少し判り易くいうと、第一人称は第二人称の前に消去される深い傾向をもち、自己がたえず相手、すなわち第二人称に対する二人称となり、そういうものとして自覚される傾向をもつ、ということである。だからそれは、私一汝の関係ではなく、汝一汝の関係であり、そこからは、私、すなわち第一人称がたえず消去されつつある、という事態を示す。こういう構造が日本人の（一般的にみた）「経験」の単位をなす、と考えている。だからそれは、本質的に私的であり、上下関係であり、自己消失的である。

（中略）ここで私はもう一度、日本語の特色をなす機能的後置詞「です」を考えてみたい。「だ」、「です」、「ございます（ママ：「でございます」の誤植であろう）」の系列は、正に、上に述べたような、第一人称・第二人称融合態としての「汝一汝」の関係そのものを表わすものではないだろうか。<sup>⑤⑩</sup>

と補足的に書いている。

ここで、山本氏の議論では、「空気」は客観的、論理的、科学的な産物ではなく、主観的、非論理的、（ある意味で）宗教的な産物だったことを思い出していただきたい。「空気」が、自分と相手の二人称的な関係からかもしだされるとすれば、森氏の議論で、「私」は「あなた」の「あなた」であると言っているのは、山本氏と森氏が異なった観点から同じ、いわゆる「日本的」なる「モノ」について、山本氏が日本人の人間関係の問題として、森氏が日本語の人称代名詞の用い



られ方という日本語を支配しているある種の原理として、語っているのが受け取れると思う。

## 5 まとめにかえて

以上、「空気」という得体のしれないモノが我々の日常において無意識のうちに我々を支配する様子を概観した。物事の決定の過程に、また日本人の人間関係のありかたそのものにどうも「空気」は大きな影響力を持っているようである。

筆者はすでに「空気に関する論考Ⅱ」を準備しており、そこではさらに「空気」がいかに関人を縛っている、というか、ある意味支配している様を紹介する。そして、これまで「日本文化」の話題として取り扱われてきたさまざまな現象が、「空気」という視点によって、かなり見通しが良くなるということについて論じる。

『「空気」の研究』の文春文庫版の解説を書いている日下公人は、本書（『「空気」の研究』）はユダヤ人は紀元前からそうした「空気」の存在を自覚していて、その克服手段に種々工夫を凝らしていたとも教えてくれる。これは、東西緊張激化の現代に生きる我々にとって大きな示唆であるに違いない。<sup>⑤</sup>

と指摘しているが、可能であれば、世界平和の可能性としての「空気論」も展開してみたい。

### 〔注〕

- ① 『週刊朝日』 p.18
- ② 『朝日新聞』東京本社（2007.8.10） p.2
- ③ 『朝日新聞』東京本社（2007.8.16） p.26
- ④ 『読売新聞』東京夕刊（2007.11.2） p.19
- ⑤ 『読売新聞』東京朝刊（2008.2.5） p.33
- ⑥ 北原保雄編著（2008）参照
- ⑦ 『読売新聞』東京夕刊（2008.4.11） p.17

- ⑧ 『朝日新聞』 東京本社 (2012.5.11) p.15
- ⑨ 『毎日新聞』 東京本社 (2007.12.26) p.1
- ⑩ 『広辞苑』 第六版 (2011) 岩波書店
- ⑪ 『大辞泉』 (1995,1998) 小学館
- ⑫ Ibid.
- ⑬ 『明鏡国語辞典』 第二版 (2011) 大修館書店
- ⑭ Ibid.
- ⑮ 『広辞苑』 第六版 (2011) 岩波書店
- ⑯ 『大辞泉』 小学館
- ⑰ 『明鏡国語辞典』 第二版 (2011) 大修館書店
- ⑱ 『使い方の分かる類語例解辞典』 (1994, 2003) 小学館
- ⑲ 山本 (1997) p.8
- ⑳ Ibid. p.9
- ㉑ Ibid. p.10
- ㉒ Ibid. p.10-p.11
- ㉓ Ibid. p.11
- ㉔ Ibid. p.12
- ㉕ Ibid. p.12
- ㉖ Ibid. p.12
- ㉗ Ibid. p.16
- ㉘ Ibid. p.37
- ㉙ 谷沢 (1992) pp.78-79
- ㉚ Ibid. p.80
- ㉛ レコード (2013) p.74
- ㉜ Ibid. p.168
- ㉝ 加瀬、山本 (1979) p.201
- ㉞ Ibid. p.202
- ㉟ Ibid. p.203
- ㊱ 『経験と思想』 の出版は 1977 年 7 月 20 日である。森氏はそれに先立つ 1976 年 10 月にパリで客氏した。
- ㊲ 森 (1977) p.80
- ㊳ Ibid. p.91
- ㊴ Ibid. p.93
- ㊵ Ibid. p.100

- ④1 Ibid. pp.113-114
- ④2 Ibid. pp.130-131
- ④3 Ibid. p.132
- ④4 Ibid. p.134
- ④5 森 (1976) p.64
- ④6 Ibid. pp.64-65
- ④7 「コンテキスト依存」とは、たとえば「おい、そこのあれ、とってくれよ」というような発話があったとき、「場面」の助けによって話し手が聞き手に言いたいことが伝わるという日本語の発話に関する現象を説明する表現である。
- ④8 Ibid. pp.66-67
- ④9 Ibid. p.68
- ⑤0 Ibid. p.69
- ⑤1 日下 (1983) p.237

## 文献

### 《新聞・雑誌類》

- 『朝日新聞』東京本社 2007年8月10日版
- 『朝日新聞』東京本社 2007年8月16日版
- 『朝日新聞』東京本社 2012年5月11日版
- 『朝日新聞』東京本社 2013年4月29日版
- 『週刊朝日』2007年7月20日号
- 『毎日新聞』東京本社 2007年12月26日版
- 『読売新聞』東京夕刊 2007年11月2日版
- 『読売新聞』東京朝刊 2008年2月5日版
- 『読売新聞』東京夕刊 2008年4月11日版

### 《辞書類》

- 『大辞泉』(1995,1998)小学館
- 『広辞苑』第六版(2011)岩波書店
- 『使い方の分かる類語例解辞典』(1994,2003)小学館
- 『明鏡国語辞典』第二版(2011)大修館書店

## 《書籍類》

- 加瀬英明、山本七平 (1979) 『イスラムの読み方：なぜ、欧米・日本と折りあえないのか』 徳間書店
- 北原保雄編著 (2008) 『KY 式日本語 ローマ字略語がなぜ流行るのか』 大修館書店
- 日下公人 (1983) 「山本七平 『「空気」の研究』解説』 文春文庫
- 日下公人、山本七平 (1984) 『対談 「空気」が「ドグマ」にならないために』、山本七平 (1997) 『「空気」の研究』 文藝春秋、山本七平ライブラリー①所収
- 谷沢永一 (1992) 『山本七平の智慧』 PHP 研究所
- 山本七平 (1969) 『「空気」の研究』、山本七平 (1997) 『「空気」の研究』 文藝春秋、山本七平ライブラリー①所収 (文春文庫版は (1983) に出版された)
- 山本七平 (1967) 『「空気」の思想史：自著を語る』、山本七平 (1997) 『「空気」の研究』 文藝春秋、山本七平ライブラリー①所収
- 森有正 (1976) 『遠ざかるノートルダム』 筑摩書房
- 森有正 (1977) 『経験と思想』 岩波書店
- 森有正、木下順二、辻邦夫、中村雄二郎 (1978-1982) 『森有正全集』 第1巻—第14巻、補巻、全15冊、筑摩書房
- レコード、ジェフリー／渡辺惣樹訳・解説 (2013) 『アメリカはいかにして日本を追い詰めたか：「米国陸軍戦略研究所レポート」から読み解く日米開戦』 草思社 (原著は Dr. Jeffrey Record(2009) 『Japan's Decision for War in 1941 : Some Enduring Lessons.』)